

# ほなゐ歴史通信

第116号

2025(令和7).9.1

万国博覧会から世界へ〜太子町のチャレンジ

赤津康明

「いのち輝く未来社会のデザイン」をテーマに本年四月に開幕した大阪・関西万博は、残すところ約一ヶ月となった。日本で初めて開催された昭和四十五年（一九七〇）の大阪万博以来六回目となる大イベントの中の地方創生SDGsフェスに、太子町が茨城県内唯一の出席自治体として参加した。

今回の出展は、内閣府が「先導的な地方創生SDGsの取組を発信」というコンセプトを掲げて全国の自治体から参加を募集し、選抜されたものである。町は基幹産業である林業をもとに「地域産木材で魅力を高めるまち」をテーマにブースを展開した。太子の山々や豊かな森林の景色を映像などで再現し、その中で地元産の「八溝杉」で作ったコースターに、主に杉の木から抽出したアロマオイルを垂らし香りを楽しんでもらうワークショップを開き、来場者にアピールした。五月二十八日から六月一日の五日間で、太子町ブースへの来訪者は約六千人、ワークショップの体験者は予想を超える約八百人と大盛況であった。地元の大阪や関西圏域はもとより関東や海外の方々から、「爽やかな杉の香りに誘われて立ち寄った」「今度は現地でこの雰囲気を感じたい」といった声が聞かれ、大きな手応えを感じることが出来た。

ここで、太子町と万博の関わりを振り返ると、百二十五年前に遡る。当時の日本は、日本茶の文化を世界に広めるために、各国で開かれる万博に茶を出品していた。佐原地区で五代にわたって続く茶業の創業者である吉成誠氏も、明治三十三年（一九〇〇）のパリ万博に地元産の茶を出品したのである。それを記す資料には「吉成誠氏佛国巴里に於て開かれたる萬国大博覧會へ自園自製の茶を出品して銅賞牌を受けたる」（塙泉嶺編「久慈郡郷土史」）とある。私は「M. YOSHIZAKI」と刻印された銅製のメダルを見せて頂いた。それは、遙か明治の時代に、太子町の茶が日本の特産品として認められていた証しだ、という深い感慨を抱いた。

近年、技術革新やグローバル化の広がりにより、社会構造や生活様式は大きく変化してきた。そして、その過程では、自然と科学技術をバランスよく融合していくことが重要となってきた。私は六月に、神奈川大学法学部自治行政学科の学生に地方自治に関する特別講義を行った。その中で、太子町では、豊かな地域資源を生かした産業に、ICTなどの最先端技術を取り入れている事例を紹介した。例えば、林業においては、今まで人力で行っていた森林調査や苗木の運搬にドローンを活用することにより、効率性が格段に向上し、さらに生産性を上げることができたのである。

今回の万博において内閣府が強調したコンセプトのSDGsとは、国連が掲げた「持続可能な開発目標」を意味するが、経済や福祉、教育など十七項目にわたる目標をクリアするためには、それぞれの自治体が独自の強みや魅力を前面に広く打ち出していくことが重要である。

その意味でも今回の大阪・関西万博への参加は、太子町の未来へ向けて、大きな弾みとなり、足跡となったであろう。

（太子町副町長）

## 下金沢十二所神社・流鏑馬復活への道（一）

吉成英男



影近者筆

今年四月、下金沢神社の流鏑馬が、二十八年ぶりに復活しました。私は、その「言い出しっぺ」でした。そこで、今回は、復活までの道のりを振り返ってみたいと思います。

まず、自己紹介からですが、私は、昭和三十六年生まれ、現在六十三歳です。大子一高卒業で、東京税関に就職しました。高校の先輩に税関に就職した人がいて、その人の引っ張りです。高校時代に柔道をやっていて、税関では柔剣道の全国大会があったので、それも志望の動機でした。税関では、海上や空港で密輸の取り締まりのほか、統計の仕事もしていました。税関は、家族のような職場で、カスタムス・ファミリーと呼ばれていました。職員は全国から集まっていて、税関同士でも交流がありました。今でも、全国に仲間がいます。

ところが、私が二十六歳のとき、父親が五十二歳で急に亡くなったのです。父親は、「おれが元気なうちは、自由にやっていい」と、東京に行くのを許してくれていました。

実家に戻ってからは、黒毛和牛を二十頭飼って、繁殖をしていました。産ませた仔牛をセリに出していました。トラックも持っていたので、近所から仔牛を集めて、セリ場まで運送する仕事もしていました。昔は、和牛農家は依上地区全部で五十軒ほど、下金沢には十軒ほどありましたが、高齢化が進んで、今は二軒です。和牛のほか、大子自動車学校で送迎の運転手を始めました。その後、教官になって五十五歳まで勤めました。和牛も一緒にやっていたのですが、掛け持ちでは目が行き届かず、三十歳後半の

頃にはやめてしまいました。大子自動車学校を辞めたのは、東日本大震災で建物が被災し、大宮自動車学校と合併することになったからです。その頃には、人口減少で、生徒が集まらなくなっていました。当時から、すでに地元以外の生徒の合宿が七割で、二月から三月は、地元の生徒が乗れないという苦情もありました。今は、ビックチャイルド、Doing Companyを経営しています。スズメバチの退治や山の草刈りなど、地域の皆さんの困りごとに何でも対応しています。ビックチャイルドという名前は、大型バイクが好きで、依上地区でツーリングチームを作っていたときのものです。大人になっても、子どものときの心を忘れないという意味です。後付けですが、「大子」という地名も、そのように解釈できるのではないのでしょうか。

本題の流鏑馬ですが、まず復活にあたっては、先輩で経験した方々の話のほか、前回の写真や資料が参考になりました。

次に、決定に至るまでの経緯ですが、神社の氏子は、総代が五人で、その中から総代長が選ばれます。総代の任期は四年。以前は、区長が総代長を兼任する慣例でした。昔は、神社を中心にして地域がまとまっていたので、総代長の方が「格上」だったのでしよう。総代は大変で、最近は成り手を見つけるのも苦労していました。私は令和四年度に区長になったのですが、総代長を兼任しました。他の総代は、私よりも一回り上の先輩でしたが、皆さんにサポートしていただきました。

区長の任期は二年ですが、二年目の令和五年度に氏子会総会に諮って、区長と総代長を切り離すことにし、任期も四年から三年にしました。宗教上、神社を信仰しない人も増えてきましたし、農業には神事が欠かせませんが、農家が少なくなり、高齢化も進んで、氏子が減ってきたからです。かつては、下金沢に百二十軒あったのが、今では七十軒を切っています。二十八年前に流鏑馬を行ったときの半分程度です。（続）

（大子町下金沢在住）

## 私と歴史

—漫画が教えてくれた歴史の面白さ—

猿田菜々美

私は大子町出身で、現在は茨城大学人文社会科学部に所属し、歴史を学んでいる大学二年生です。日本史、特に江戸時代に興味が有り、最近では史料を読むための勉強に力をいれています。

私が歴史に興味を持ったきっかけは、小学生のときです。私は漫画を読むことが好きで、よく家で様々な漫画を読んでいました。そして、小学五年生のときに、日本史の学習漫画である『角川まんが学習シリーズ日本の歴史』を読みました。親しみやすい絵柄で描かれており、小学生が読んでも歴史の流れが分かりやすく、全く歴史に触れたことがなかった私でも楽しんで読むことができました。特に、源頼朝と義経、足利尊氏と直義といった兄弟同士の対立や、夢半ばで倒れた織田信長、幕末の坂本龍馬など、歴史上の人物たちのドラマに強く心を動かされました。小学校では、六年生から歴史の授業が始まりますが、漫画という形から歴史に触れたことで、歴史は、ただの暗記科目ではなく、様々な人物の思惑や、時代背景が複雑に絡み合う、一種の物語だと感じるようになりました。

その後、私の歴史への関心をさらに高めたのは、みなもと太郎作『風雲児たち』という漫画との出会いです。この作品は、関ヶ原の戦いから幕末にかけての歴史をもとに描かれたギャグ漫画です。しかし、繊細な人物描写やシリアスなシーンも多く、歴史上の人物一人ひとりが生き生きと描かれており、瞬く間に私を虜にしました。夢中になって一冊一冊を繰り返し読み直しているうちに、セリフを覚えてしまうほどでした。全部で五十四巻にもなる大変長い漫画ですが、壮大な歴史のつながりを感じることができ

る漫画であり、私が江戸時代に興味を持つきっかけとなったものでもあります。連載中に作者が亡くなってしまったため、未完となつていますが、この漫画は、今でも私の歴史好きの原点となっています。この漫画を読んだことで、私の中での、「歴史は事実をもとにした壮大な物語である」という認識が再確認されることにもなりました。

また、中学生の時には「いばらきつ子郷土検定」に出場した経験があり、大子町や茨城県の歴史について詳しく学ぶ機会を得ました。それをつっかけに、大子町の歴史にも興味を持つようになり、現在は中央公民館で開催されている、野内正美先生の「大子町の歴史を学ぶ講座」にも参加しています。また、幕末に水戸藩が与えた影響に関しても興味を持ち、大学での研究の難しさを感じながらも、調査を進めています。

このような体験を通して、いつしか私は、「歴史の面白さを多くのひとに伝えたい」と思うようになり、将来は高校の日本史教員を目指すようになりました。現在は大学での専門的な学びに加え、教職課程を履修し、教員免許取得に向けて励んでいます。将来、もし教員になることができたなら、単に歴史の出来事を暗記させるだけの授業ではなく、その時代を必死に生き抜いた人たちの物語を感じてもらえるような授業をしたいと思っています。そして、私が体験してきたような歴史の面白さや魅力を、生徒たちに伝えていきたいです。そのためにも、今後さらにも勉強を重ね、歴史への理解を深めていこうと思います。



筆者が参加した大会

令和2年2月1日開催 大子中準優勝

(大子町池田在住)



## 里山にある「生きた歴史」

的場悠人

私は、大学を卒業後、一年半ほど都内で働いていましたが、「このままでは地球はもたない。生活様式を丸ごと変革する必要がある」と感じて、自然豊かな大子町に移住しました。大学時代から縁のあった友人の紹介で、茅葺き屋根の古民家を紹介してもらい、里山暮らしは全くの初心者でしたが、「住めばどうにかなる」と、思い切って移住を決めました。令和四年に着任した地域おこし協力隊の任期中は、主に茅葺き屋根の葺き替えとヨガ教室開催に取り組みました。最近では、「野良哲学者」という肩書きを使い始めています。畑で種を蒔きながら、思考の種を蒔く、森を歩きながら、ふと降りてくる言葉を書き留める―そんな日々を過ごしています（今年、二冊の本を上梓しました）。

そんな野良で哲学をしている私にとって、歴史とは、教科書で習うような遠い出来事でありながら、日々生きている中で出会うものでもあります。インドの古い言葉で、歴史は「イティハース」と言うのですが、これは単に「そうであったこと」という意味です。歴史という、何年に〇〇戦争があったとか、△△という統治者がいた、というような記述を思い浮かべがちですが、「そうであったこと」は、大きな出来事や著名な人物のことだけではありません。むしろ、何気ない日常がずっと「そうであった」からこそ、今の私たちが「こうである」ことができています。

例えば、ある家庭で喧嘩が起きて、



筆者近影

大きな事件になれば、それは歴史書に残るようなことになってしまいかもしれません。でも、多くの場合、誰かが少し我慢したり、相手の機嫌をとったりして、静かに一日が終わっていく。それが、歴史書に残らないけれど大切な「そうであったこと」です。もし歴史が、ほんとうに「戦争に次ぐ戦争」だけだったのなら、私たちはとくに滅びていたでしょう。人類がこれだけ争いを繰り返しながらも、今も生き延びられているのは、歴史書には残らない「当たり前」の日常の中で、誰かがちよつと我慢したり、平穏な気持ちで居たりすることが、争いが起きることよりもずっと、「そうであったこと」だったからです。

昨年夏に行った茅葺き屋根の葺き替えは、「そうであったこと」に立ち会う機会でした。職人さんは古くなった茅を剥がしながら、「二十年前の職人はどうやって葺いたのか、対話しながら茅を剥がしていく」と言います。私自身も、築百五十年を超えるこの古民家に暮らす中で、ある時から「この家（この家に刻まれた記憶、先人たちの意思、地域の皆さんの想い、棲みつく無数の生き物たち）」は、私に何をしてほしいだろうか？と、想いを馳せるようになりました。不思議なことに、「家の意思」を汲み取るようにして動き出すと、家そのものが、私たちを見守り、後押ししてくれるような出来事が起きたりします（茅刈り直前に軽トラを譲っていただいた、なんてこともありました）。

そしてまた、私たちは次のように問いかけることもできます。「未来の子孫に対して、どんな贈り物を贈ることができたら、私たちは自分に胸を張れるか？」便利さと速さが重視される現代において、手で茅を刈り、仲間と協力して屋根を葺くことは、時代に逆行しているようにも見えます。でも、ここには「生きる歓び」がある。「心の豊かさ」もある。この無形の財産が、屋根が残っていくことと同じくらい、「そうであったこと」として、重要なものだと思っています。

（大子町冥賀在住）

## 戦時下、三井報恩会の支援と黒澤村（上）

―「いはらき」新聞に見る戦争時代の大子（10）―

齋藤典生

昭和五年（一九三〇）以降あらわになる昭和恐慌により全国の農村は経済的窮状に陥り、都市部には失業者があふれた。七年には、前蔵相の井上準之助暗殺などテロ事件が相次いだ。世情が騒然とするなか、財閥が利益を独占し経済を支配しているとの財閥批判が激化し、これに対応するため「財閥転向」とよばれる様々な改革が財閥自身の手で具体化されることになる。四大財閥の一つである三井は、傘下の諸会社の株式公開、同族の第一線からの退陣、利益の社会への還元等の諸改革にいち早く着手した。

三井報恩会（以下「報恩会」と略）は、当改革の一環として組織され、昭和九年五月から業務を開始する。報恩会の資金は、社会事業、文化事業、福祉事業等広範囲に活用されたが、とくに注力した事業の一つが農村振興であった。九年度の青森県西平内村（現平内町）、岩手県の彦部村（現紫波町）に続き、一五年五月に「特定振興村」に指定されたのが黒澤村である。なぜ黒澤村が選ばれたのか。報恩会の『事業報告 昭和十五年度』には「県の推薦により」とあるだけで指定に至る経緯は不明だが、当時黒澤村が経済更生に鋭意取り組む模範村の一つであったことは確かである。

「特定振興村」としての歩みは、昭和一五年六月一〇日の宣誓式から始まる。午後一時、飯村紀一村長ほか役場関係者や村民たち五百余名が、報恩会からは米山梅吉理事長及び山口安憲常務理事が、来賓としては県経済部長や大子営林署長らが町付小学校に集った。一連の儀式の後の様子を、新聞は次のように伝えた。「更生計画完遂を期して新たに結成された黒澤村振興会の発会式を挙

げ会則を満場一致拍手を以て議決した、かくて県の最北端、県下第一の高峰八溝嶺の山懷に抱かれ八溝川の溪流滔々とせらぐ大自然境、しかも四十歳の青年村長飯村紀一氏統率のもとに挙村一致県の経済更生指定村として近代的農村への躍進を続けつゝある黒澤村はいまゝた三井報恩会より更生村の指定を受け毎年一百万づゝ五ヶ年計画五万円の助成金を交付され、全面的更生計画完遂へ邁進することゝなり村民の意気頓に昂揚、県下一の更生村建設の熱意に燃えてこゝに力強い第一歩を踏み出したもので各方面の多大なる期待をあつめてゐる」（昭和一五年六月二二日付）、と。

「特定振興村」の事業は、報恩会が直接事業に関与する「直接経営事業」に位置付けられていたので、報恩会からも職員が派遣され、指導に当たった。その助言を受けながら事業の計画立案及び実行の中核になったのが前出の黒澤村振興会（会長は飯村村長）であり、そのもとに実行組織として村常会、部落常会、各実践班が編成された。また、各種事業を推進する拠点として、黒澤村振興会事務所及び産業組合事務所が、いずれも役場周辺に新築された（一五年六月二二日付、九月九日付）。こうして整備された推進体制のもとで、初年度は助成金八四一四円を受け、「産業組合事務所建築、同組合専任事務員及村農会優良技術員設置、農繁期託児所開設、農家食生活改善施設としてパン焼竈設備、味噌醬油製麹講習開催等」の事業が展開された（『事業報告 昭和十五年度』）。

他方、こうした取り組みの中心を担った飯村村長は、俄然注目の的となる。大政翼賛会の発足を受けて茨城県は下部組織の整備検討に入り、その示唆を得るためとして「模範的な部落会、町内会の組織」をもつ「革新的な町村長」五人を選び座談会を企画するが、その一人が飯村村長であった（一五年一〇月三〇日付）。

参考文献 春日豊『財閥転向』の一側面―三井報恩会の設立と推移―

（東・丹野編『近代日本社会発展史論』昭和六三年所収）

（水戸市在住）

## 「大子開拓」 ― 満洲から行方へ（二）

去る五月二十一日、旧武田村（現行方市）に戦後、入植した大子町満洲分村移民の一人である吉澤里子さん（九十二歳）の長男・隆さん（七十四歳）と三男・進さん（六十九歳）にお会いする機会を得た。里子さんは、平成十三年に、遊志の会（当時）が聴き取りを行った一人である（本誌第十九号）。

今年四月、大子町満洲分村移民の方たちの共同墓地が改修された。そのとりまとめをされたのが、吉澤さんご兄弟である。ご兄弟は、創業六十年の地元の建設企業、株式会社羽生工務店（行方市内宿）に現役でお勤めだが、改修には、同社の社長、羽生義隆さん（六十九歳）にも協力をいただいたという。当日は、同社にて、ご兄弟と羽生さんからお話を伺った。

共同墓地が建設されたのは、今から四十年以上も前のこと。そのときに建てたブロック塀が、今にも倒れそうになっているのを見て、改修を思い立ったという。そこで、ご兄弟は、以前から地区で貯めていたお金で改修できるのか、羽生さんに相談したところ、

「快く引き受けてもらえた。その後、地区の皆さんに説明したり、改修のために隣地を借りたりするのに約三年を要したが、ようやく今年三月に着手、四月に竣工した。」

進さんは、お勤めの傍ら、親から受け継いだ農地を減らさずに、農業を続けている。「親が命をかけて開拓した土地だから捨ててはおけない。陸田で赤字だけど、意地ですよ」と話す。かつては、どの家も酪農を

していた。隆さんも高校卒業後、県の畜産試験場で繁殖技術の免許を取ったが、搾乳はお葬式の日も休みがなく、二十歳の頃には諦めた。地区で今も続けている家はないという。

隆さんによると、ご兄弟の父親、清生さん（昭和五十八年没）は無口で黙々と働く人だったが、戦後、間もない頃のことを思い出して、次のように話していた。「亡くなった人がいても、最初のうちは、お寺もお墓もなく、見かねた地元のお寺さんが檀家を引き受けてくれた。他所の人たちは、自分たちが開拓する姿を見て、あの人たちは命がけだ、怖いもの知らずだと言っていた」。

羽生さんのお話では、大子町満洲分村移民の方たちは、地元では「大子開拓」と呼ばれているという。羽生さんは、父親から、「「大子開拓」の人たちは皆、真面目で仕事熱心。悪く言う人を聞かない。入植した場所は、昔は山で平地林。コメは作れないところで、相当苦勞したと思う。真面目でないと、いられなかっただろう」との話を聞いていた。羽生さんの父親も、旧大野村（現鹿嶋市）から羽生家の分家に婿に入った苦勞人で、「大子開拓」の方たちに共感していたのではないかと話す。「吉沢さん始め「大子開拓」の方たちの思いに応えたいと考え、今回の改修を引き受けました」。

進さんに、地区の若い方たちに、開拓の話はしますかとお聞きしたところ、「息子には話したことはないです。地区の新年会にも、若い人はなかなか出てこない。自分の生き様で見せているつもりだけど、分かってももらえていないかなあ」との答えが返ってきた。

お話を伺った後、ご兄弟の案内で共同墓地にお参りさせていただいた。ここには、かつて、満洲で亡くなった方たちの木製の慰霊碑が建っていたという。進さんは話す。「自分の人生の目標は慰霊碑を再建することです。祖父母や親の代の人たちは開拓に命をかけた。彼らが生きた証を残したい」。

（続）  
追記 今回の取材は、羽生様とのご縁に導かれて実現しました。

羽生様、吉澤隆様、進様に厚くお礼申し上げます。（小松崎研）



左から吉澤進氏、隆氏、羽生義隆氏



## 【保内衆の戦国時代(5)】

### 戦国時代の保内の和紙生産

戦国時代の終わり、佐竹氏に仕えていた家臣の一人に大和田重清という人物がいます。この重清が記した、文禄二年(一五九三)四月から十二月までの日記(「大和田重清日記」)が残されています。これは、朝鮮出兵のため肥前名護屋(現佐賀県唐津市)に設けられた佐竹陣中での出来事、城下建設が進む水戸や前当主佐竹義重が居住した太田の様子等が記された大変貴重な記録になっています。この日記の中に、保内に関わる興味深い記事が出てきます。

文禄二年八月十八日、肥前名護屋を出発した重清は、途中京都に寄りながら、およそひと月半をかけて国許の常陸に戻ります。常陸に近づいてくると、重清を迎える使者が派遣されており、閏九月四日には、重清が滞在する上野国太田(現群馬県太田市)まで佐竹氏家臣小野崎玄蕃と保内衆が参上しています。重清は閏九月六日に水戸に到着した後、同日中に太田(現常陸太田市)の屋敷に帰還しています。太田に到着した重清のもとには、連日、所領とする村々の百姓からの祝いの酒・肴や公事(地域の産物に掛けられた雑税)、同僚である佐竹氏家臣からの贈り物が届けられています。そのような中、次のような贈答に関わる記事が記されています。

閏九月十日 「保内之河内、子紙持参」

閏九月十一日 「保内衆三人来、雑紙上ル」

閏九月十日に、保内に居住する河内という人物が「子紙」を太田にいる重清のもとに届け、翌十一日には保内衆三人が、「雑紙」を重清に進上しています。わずかな記述ではありますが、保内地域に居住する人物から連日紙が届けられており、戦国時代末期の保内では、紙の生産が行われ、それが特産品として扱われていたことがわかります。紙が太田の重清のもとまで届けられているこ

とから、保内の紙は当時の常陸を代表する都市の一つである太田まで運ばれ、市場にも流通していたと想定されます。

戦国時代の常陸国内の紙生産に関わる史料はほとんどなく、その詳細は明らかにされていません。しかし、当時岩城氏の所領であった小里地域(旧里美村域)に関わる史料(「岩城領小物成目録」)に興味深い記事が見えます。文禄四年(一五九五)、旧岩城領を領有していた北義憲は、岩城領で賦課されていた小物成(雑税)を調査しました。常陸国内にある岩城領の小物成の中には、楮と紙が品目として挙げられています。その内訳を見ると、

嶋名・秋山 楮四束(紙四十枚)

関本上ノ村 楮二束半(紙二十五枚)

小里上ノ村 楮四十三束(紙八帖三十枚)

小里中ノ村 楮百三十七束(紙二束七帖二十枚)

小里下ノ村 楮四十八束(紙九帖三十枚)

のように、現在の高萩市・北茨城市、旧里美村域に、紙の原料である楮の量を基準に多数の紙が賦課され、その大部分が小里から進上されるものであったことがうかがえます。このことから、「大和田重清日記」が記された頃、小里地域が楮や紙の生産地として知られていたことがわかります。また、江戸時代初頭(慶長十一年(一六〇六)または元和四年(一六一八))には、和紙の名産地西野内にも近い棚谷村(現常陸太田市)に、「かみ舟やく」(紙を漉くために使用する漉き舟を基準とした税)が賦課されています(「常陸国北郡里程間数之記」所収文書)。戦国時代から江戸時代初頭の常陸国北部では盛んに和紙が製造されていたのです。

同時期の保内での紙生産を物語る史料は「大和田重清日記」の記事しか残されていませんが、保内も紙の主産地であったことは確かであったと考えられます。ここから、保内衆が経済基盤としていたものの一つに、保内における和紙生産があったと想定されます。

(藤井達也)



## 近津神社の中田植

区分・種類 大子町指定無形民俗文化財（第二十二号）  
 指定年月日 平成二十六年九月二十四日  
 所在地 大子町大字下野宮一六二六  
 管理者 中田植保存会

中田植は、下野宮近津神社で毎年夏至の日に行われる田植祭です。夏至は二十四節気のひとつで五月の「中」に当たり、中田植の名称は田植祭が夏至に行われることに由来しており、今年は六月二十一日に行われました（写真）。

祭りは、神殿にて神事を行った後、田植神事に入ります。神田にしめ縄が張られ祭主（神官）による修祓の後、太鼓、笛、鼓の奏楽に合わせて田植歌の唱われるなかを、十五名の早乙女が神田に苗を植え付けます。早乙女は浅葱の襦袢に赤襷をかけ、赤いもんぺをはき、すげ笠をかぶります。田植歌奏楽は神田わきに設けられた囃子舞台にて、中田植保存会により行われます。

（参考文献：大子町教育委員会編『大子町の文化財（改訂版）』（二〇一六）

（山崎仙一）

編集 大子町歴史資料調査研究会  
 編集人 藤井 達也（大子町歴史資料調査研究員）  
 大金 祐介（大子町歴史資料調査研究員）  
 小松崎 研（大子町歴史資料調査研究員）

山崎 仙一（大子町教育委員会事務局）  
 大金真理子（大子町教育委員会事務局）  
 大子町教育委員会

久慈郡大子町大字池田二六六九番地

☎ 0295（72）1148

発行日 二〇二五年（令和七）九月一日